

第2章 国外の取り組みに関する情報収集

(1) ユネスコ創造都市ネットワークへのヒアリング調査

平成30年6月12日～15日の4日間、ポーランド共和国・クラクフおよびカトヴィツェにおいて、ユネスコ創造都市ネットワーク（UNESCO Creative Cities Network、以下UCCN）の年次総会が開催された。総会には、50人以上の市長や副市長を含む350人が参加し、SDGs、特に11番目の達成目標（持続的な都市とコミュニティ）を達成するための誓約を再確認し、政治的かつ戦略的な対象について検討された。

平成31年2月15日、ユネスコ本部において、UCCN担当のDenise Bax氏へヒアリングを行った。そこでBax氏は、総会が持つ2つの目的について語った。

ひとつめの目的は、これまで接点のない都市同士が会合の場とし、各加盟都市の実施事項を互いに理解する、ということだ。

現在のUCCNは、『加盟国』と仕事をするごとと、『city（以下都市とする）』の単位で仕事をするごとを重視している。都市単位による活動の利点は、さまざまなアイデアを実験、応用することができることだ。Bax氏は、「ユネスコはアイデアを出す機関であり、複数の都市において政治プログラム（アイデアのひとつひとつ）をテストすることができる」と述べている。それは、全ての加盟都市が画期的な政治プログラムをテストするだけではなく、その結果をUCCN全体で共有し、各都市が自らの環境に合わせて応用することに繋がる。

総会のもうひとつの役割は、「理想の都市 ‘The Ideal City’」を考えることにある。

現在、各都市において議論の中心を占めているテーマは、「文化」や「創造性」である。しかし、世界の各都市が集まる総会では、「文化」や「創造性」だけではなく、エネルギー問題といった社会的問題まで、論点を深めることができる、とBax氏は指摘する。

今年度の総会に、自国の深刻な事情により参加できなかった都市があったそうだ。しかしそれによって、その深刻な問題を「デザイン」を使って解決する、ということが総会の話題にのぼった。つまり、「音楽」や「クラフト&フォークアート」などのUCCN各分野において、都市は高度な専門性を求められるだけではない。それぞれの分野をどのように生活の中に組み込むか、が問われるのである。

UCCN加盟にあたり、世界遺産がその都市にあるかどうか、ということではない。むしろ、加盟都市やそれ以外の都市に対して「何を提案できるのか」、ということがひとつの基準だそうだ。先にも述べたが、総会は都市同士の繋がりが生まれる機会である。それを契機に、何を生み出すことができるか、を考えるべきである。

Bax氏は、2015年9月に国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」について、加盟都市それぞれが理解する重要性を指摘している。「文化」と「創造性」が、互いにクロスオーバーしているためである。そして、そのことを十分に意識した活動をしなければならない。各都市の目標を支援することがユネスコの役割であり、他の都市をアソシエイトしていくことは加盟都市の使命なのだ。

最後にBax氏は、「日本のネットワーク（CCNJ）はしっかりと確立されている印象を持っている」と語った。既存のネットワークを情報交換の場として活用するだけではなく、得た情報を、自らの都市でどのように活用できるかを具体的に考え、実行に移さなければならない。これまでの功績を羅列し、受け身でいる時代ではない。都市各々が企画力と提案力を持ち合わせ、全ての都市がリーダーシップを発揮するすることで、「理想の都市 ‘The Ideal City’」に向けた相互作用が期待されている。